障害児教育雑記帳(6)

聞こえに障害のある子どもたちについて思うこと

学校教育学部
障害児教育教室
谷本忠明

「わが指のオーケストラ」（秋田書店）（左）と
「君の手がささやいている」（講談社）（右）

一　学校場面の子どもたち

文部省の資料によると、聞こえに障害のある義務教育段階の児童・生徒の数は、聾学校が三六四三名、難聴特殊学級が一二五二名、通級による指導の対象となっている難聴児が一一四一名となっています（平成五年度）。約二四〇〇名の子どもたちが、耳の聞こえる児童・生徒たちと同じ学校で生活していることになります。

しかし、回りの人々にとって、耳が聞こえない、聞こえにくいということがどういうことなのかを十分に理解することは、なかなか困難な場合があるようです。ある民間の教育機関が、その機関に通っていた難聴児百名を対象に行ったアンケート調査によると、七十三名が小・中・高校でいじめられた経験があると回答していました。具体的な回答の内容をみると、聞こえの障害についての理解がもう少しあれば、と思われるものが少なくありませんでした。

二　音のない世界とは

実は、私たちが音のない世界を体験することは容易ではありません。指で耳をしっかりとふさげば、音のない世界を擬似的に体験できると思われるかもしれませんが、この方法では、自分の声まで聞こえなくすることはできません。程度の違いはありますが、聞こえに障害があるということは、ことばも含めた回りのさまざまな音情報が入りにくくなると同時に、自分の声をフィードバックすることも困難となることを意味しています。

外部からの音や反響をほとんどなくした、無響室と呼ばれる部屋に入ったときに圧迫感があったり、ヘッドホンで音楽を聴きながら歌っている歌が調子外れになっていたりするのは、音を意識するしないにかかわらず、ふだん私たちがいかに音を情報として取り入れながら生活しているかを物語る例ではないかと思います。

三　子どもたちへの配慮

では、聞こえに障害のある子どもたち（大人も含めて）に対して、どのような配慮が必要なのでしょうか。細かいことはいろいろあるでしょうが、私は次の三点を心に留めておくことが大切ではないかと思っています。

一つは、話すときには、子どもに顔が見えるようにし、少しゆっくりめに話す、ということです。補聴器は、後ろからの音には有効ではありませんし、距離が離れるほど聞き取りにくくなります。また、多くの子どもたちは、補聴器からの音だけでなく、相手の話す口元を見て、話されている内容を理解しています。ですから、比較的近い距離ではっきりと口の動きが読みとれるように話すことが必要になるのです。

二つめは、コミュニケーションの手段にこだわらなくてもよい、ということです。時に子どもの話す内容がよく理解できなかったり、うまく伝わらなかったりすることがありますが、わからないときには、筆談や身ぶりなど音声以外のいろいろな手段を自由に用いればよいと思います。要は、何とか自分の気持ちを伝えよう、相手の言うことを理解しよう、という姿勢をもつことだと思います。

そして三つめは、一人の子ども（人間）として接する、ということです。聞こえに障害がある子どもたちと話していると、彼らは決して自分たちを特別扱いして欲しいと思っていないことがわかります。大切なのは、クラスの同じ仲間として、同じ年齢の子どもとして接することだと思います。

四　聞こえの障害を理解するために

手話をテーマにしたものが多いようですが、最近、聞こえの障害に関連した出版物が一般書としていろいろと出されるようになりました。コミック本も出されています。二つだけ紹介しておきます（写真）。聞こえの障害についてさらに理解していただくために、一度お読みいただければと思います。

プロフィール

（たにもと・ただあき）
◇昭和五十五年　広島大学大学院教育学研究科修士課程修了
◇昭和五十九年より広島大学学校教育学部で聾学校教員養成課程を担当
◇専門　聴覚障害心理